



始

魔

め

王

方

め

I

【小説】笑うヤカン

story works by warau yakan / illustration works by shindou arata

【イラスト】新堂アラタ

試し読み版



CONTENTS

HOW TO BOOK ON THE DEVIL

I

プロローグ	6	
Step. 1	近隣の村を襲撃しましょう	23
Step. 2	愚かな侵入者を調教しましょう	47
Step. 3	穢れなき乙女を生贄に受け取りましょう	87
Step. 4	邪悪なる下僕どもを揃えましょう	110
閉話	部下と交流しましょう	150
Step. 5	街を蹂躪しましょう	166
Step. 6	欲にまみれた冒険者どもに絶望を与えましょう	185
閉話	たまには部下を労いましょう	259
Step. 7	魔王を始めましょう	279
エピローグ		321
「書き下ろし」		
マリーとローガン		323
あとがき		345

重く鈍い鉄の鎖が、じやらりと音を立てる。

両腕を拘束する手枷が、まるであざ笑っているかのようだ。

うんざりするほど真つ青な、雲一つない空が目広がる。

その下で黒煙を上げる塔を、彼はただ虚ろな瞳で見つめた。

「さっさと歩け」

名も知らぬ兵士に鎖を引かれ、家畜のようにのろのろと少年は歩く。

この先、彼には一切の自由がないのだろう。

だが、それも、どうでも良い事だった。

全ては失われた。住む場所も、愛するものも、何もかも。

今更自由一つを失ったとて、何だというのか。

彼はもう一度振り返って、燃え落ちていく塔を見た。

在りし日の残骸が、音を立てて崩れ落ちていく。

その様に、空虚な心の一つだけ想いが沸きあがった。

——この日、自分を裏切ったものを、絶対に許さない。

琥珀色の髪の若き魔術師は、そう心に誓った。

プロローグ

暗く深い、日の光など射しようもない地の底で、男はつるはしを振るっていた。

狭く暗い地下道に相應しい、みすぼらしい男だ。

男は相当な高齢らしく、顔は皺に覆われていない箇所はなく、背は曲がり曲がっている。身につけているのもボロボロになった灰色のローブで、それも狭い地下道の埃と土にまみれ、その惨めな様相をいっそうみすぼらしくしていた。腰につけたランタンもかなりの年代物で、辛うじて男とその周囲を照らしている。

全身は汗にまみれ、つるはしを振るう腕にもはや力はない。

息も絶え絶えで、いつ絶命してもおかしくないほど男は疲弊しきっていた。

見た目も中身も疲れきり、磨耗しきったその男の中で、目だけがぎらぎらと強い光を放っていた。

男は何かに取り憑かれたかのように、必死につるはしを振るう。振るう。振るう。

そして、ついに。

不意にごとりと音がして、土壁の一部が崩れた。

男は目を見開き、その向こうを見る。

「ふ……ハハッ、アハハハハハ！」

そして、今までもにも勝る熱心さでつるはしを振るい始めた。

土壁はみるみるその亀裂を増していき、やがて人が通れるほどの大きさになる。

男はつるはしを放り投げると、哄笑と共にその中に躍りこんだ。

「ハハハハハ！ やった、ついにやったぞ！ この、味わいさえ感じるほどの芳醇な魔力の香り！ ついに見つけ出したのだ！」

男は自身の胸元を探ると、首にかけていた首飾りを強引に引きちぎった。乞食よりもみすぼらしい男が身につけていた唯一の装飾品であるそれには、小指の先ほどの大きさのガラスで出来た瓶が繋がれていた。

その瓶を男は地下道の先にあつた空洞の中心に掲げる。すると辺りの空気が渦巻き、ゆつくりと瓶に凝集していく。それと同時に、瓶の中には琥珀色の液体が湧き出てきた。

「視認さえ出来る高濃度の魔力の結晶……！ 素晴らしい、これだけあれば！」

男は瓶を地面に置くと、低い声で呪文を唱え始める。半刻（一時間）ほどもそうしていただろうか。長い長い呪文は徐々に熱を帯び、弱弱しく呟くように紡がれていたそれはいつの間にか朗々と、力強い声よって唱えられる。

最後には半ば叫ぶようにして呪文は終わりを告げ、それと同時に男の身体は強い光に包まれた。

「力が、溢れてくる……これが若い肉体というものか！」

光が消えた後には、若く逞しい青年が立っていた。

腰が曲がり、皺に覆われた老人の面影は微塵もない。真つ直ぐ剣のように伸びた背に端正な顔立ち。四肢は力に溢れ、肌は絹のように滑らか。ただ一つ、ぎらぎらと光る双眸だけが元の老人と共通していた。

「おっと、もう一杯になるか」

瓶になみなみと湧き出てきた液体は、早くも瓶の九割ほどを満たしていた。

男が若返った時に僅かにその量を減じさせたものの、溜まる速度の方が圧倒的に早い。

短く呪文を紡げばその指先から琥珀色の魔力が溢れ、瓶を貫く。

すると瓶は見る間に大きく膨れ上がり、人ひとりが入れるほどの大きさになった。

「これで当分は持つだろう。さて……」

男は先ほどよりも少し長めの呪文を唱え、腕を振るう。まるで箒で掃くかのように光の幕が壁を撫でて、天然の洞窟はレンガで造られた殺風景な地下の一室へと姿を変えた。

次いで、男は指の先に歯を突き立て、石畳の床に血で魔法陣を書き始める。

書きあがった魔法陣を軽く撫でてその出来を確かめると、男は更に呪文を唱え始めた。

若返った時よりも更に長く、複雑な呪文だ。

男の額には珠のような汗が噴出し、苦痛に顔が歪む。

空気が震え、腰に吊るしたままのランタンの炎がふっとかき消えた。

それまで静寂を保っていた空間に、弓の弦を絞るような音がギリギリと鳴る。

光の消えた空間を支配していた闇が、まるで意思を持つかのように蠢き、ゆつくりと形をとり始

める。

その影は明かり一つない暗闇の中でお暗く、はっきりとした輪郭をとり……

そして、鈴の音のような声をあげた。

「……わたしを呼んだのは、あなた？」

男の前に現れたのは、申し訳程度の衣服に身を包んだ妖艶な美女だった。

黒々とした髪は長く艶やかで、白い肌を包むように伸びている。

ほっそりとした手足はすらりと伸び、しかし出るところはしっかりとその存在を主張していた。

「そうだ」

女の問いに、男は頷く。

「そう……じゃあ、呼んでくれた御礼にとびきりの夢を見せてあげる。この魔法陣を消してもらえない？ このままじゃ、その素敵な唇にキスする事も出来ないわ」

絶るような弱々しさで、女は甘い声を出した。それを男は冷笑する。

「それは出来ないな。その魔法陣を消してしまえば、お前は自由に行動する事が出来る。お前はすぐさま俺の魂を奪って魔界に戻るだろう。魔法陣を消すのは、契約を結んでからだ」

男がそう言った瞬間、女の表情が一変した。

哀れみを誘う弱々しい少女のものから、ふてぶてしく経験豊富な娼婦のそれへと。

「つまらないの、ちよつとした冗談じゃない。これだけの魔力を用意出来る魔術師がそんな初歩的な失敗をする訳がないんだから」

女悪魔は空中に椅子でもあるかのように虚空に腰掛け、足を組む。

意識するとしなやかかわらず、その動作は扇情的で艶めかしかった。

「で？ わたしは何をすればいい訳？ 愚かな男達から精を吸い上げる？ それとも、あなたの敵に無限の悪夢を見せてやる？ あなた自身に最高の夜を見せてあげるのもいいけど」

「うむ。お前にはダンジョンを作ってもらいたい」

「はあ!？」

男の言葉に、思わず女悪魔は見えない椅子から転げ落ちた。

「淫魔のくせに色気のない転び方をするな。そんな下着みたいな格好で脚を広げられても、かえって興ざめするとかだな……」

「そんな事はどうでもいいっ！ 今、なんかダンジョンを作れて聞こえた気がしたんだけど？」

「ああ、そう言った」

男は頷き、両腕を一杯に広げ地下室をぐるりと見渡す。

「いまだかつて誰も見た事のないような、深く、広く、凶悪な迷宮を。無数の罠と、怪物どもと、財宝が待ち受ける大迷宮を。地下の世界を統べるかのような、途方もないダンジョンを作って欲しい」

女悪魔は思わず頭を押さえた。病気などとは無縁の身だ。

直接的な打撃以外で頭痛を覚えるなど初めての事だった。

「あのね……百歩譲って、そのダンジョンの守衛として召喚されるならまだわかる。そういう条件



で呼ばれた事もなくはないしね。でも、ダンジョンを作れっつてどういう事よ!! そんな事はゴブリンかゴーレムにでも任せなさいよ!

「無論、穴を掘る作業はそういった者どもに任せる。だがそれ以外の膨大な作業を手伝う者がいるのだ。ダンジョンの通路は、部屋はどのように配する? 罾と怪物どもは? 守衛となる魔物も生き物なら、餌がいる。その調達は如何にする? 我が迷宮が大きくなれば、それを脅かそうとする不届き者も出るだろう。そのような輩への対処は? 考えるべき事、すべき事は無数にある。それを、貴様に手伝わってもらいたい」

「……それはわかったけど、何でわたしな訳?」

ようやく体勢を直し問いかける女悪魔に、男は指を三本突き出してみせる。

「理由は三つだ。まず第一に、俺は人間を信じておらん。人は必ず裏切る。妖魔や亜人の類もそれは同じだ。お前達悪魔は隙あらば人を陥れようとすが、契約を破る事は絶対に出来ない。だから人間ではなく、悪魔を選んだ。第二に、通常悪魔は高位になればなるほど高い力と知恵を持つが、その分だけ契約や存在の維持に大量の魔力が必要となる。お前達淫魔は人間の欲望に密接に関わり、精を吸い取る事を生業としている変わり種だ。さほど強くはない代わりに、必要な魔力に比して賢く、人間の感情の機微にも聡い。だから、淫魔を選んだ。第三に……」

男はそこで言葉を切り、女悪魔の身体を眺めてニヤリと笑みを見せた。

「どうせ傍に置くなら、見てくれだけでも美しく若い女が良い。だからお前を選んだ」

女悪魔は、一瞬ほかんとして男を見た後、くすりと笑った。

「……なるほどね。いいわ、その仕事、手伝ってあげる」

「では、この契約に名をもつて同意してくれ」

男は懐から紙を取り出し、女悪魔に見せる。相も変わらぬ暗闇の中だが、闇の眷属たる悪魔にそんな事は関係あるはずもない。

「契約内容を用意してあるの？ 準備がいいのね……って細かつ!? 一体何条あるのよコレ!？」

魔法陣越しに提示された羊皮紙には、細かい字でびつしりと条文が書かれていた。

「言っただろう、お前達悪魔は隙あらば人間を陥れようとする、と。それを防ぐ為の条文だ。極端にお前の不利になるような不平等な条文はないから安心しろ……と言っても信用は出来んだろうからな。好きなだけ確かめるがいい」

「そんな事しなくつたつて裏切ったりしないって、もう……あーもう字が細かすぎるのよ……」
ぶつぶつと文句を言いながら目を細めつつ、条文に目を走らせる。

「ん、とりあえずはいいわ……これ、目に見えないくらい細かい文字とか、特殊なインクで普通には見えない文字とかで書いた条文が隠されたりしてないでしょうね。あつたら契約自体無効だからね」

疑いの眼差しを向ける女悪魔に、男は心外そうに眉をひそめた。

「そちらの不利になるような文はないと言っているだろうが。疑い深い奴だな」

「お前が言うなっ! ……まあいいわ。じゃあ、契約するよ」

「ああ。汝、サキユパスよ。この契約に従い、名をもつて我が力となるか？」

名前は、魔術師や悪魔といった魔に関わる者達にとって重大な意味を持つ。

ある程度以上の力を持つ者であれば、相手の名前を知るだけで呪いをかけ、その魂を支配する事さえ出来る。

悪魔との契約はそれを利用したものであり、名前をもって結んだ契約はお互いにかなる事があつても破る事は出来ない。

「我が名、リルシャーナにかけて誓う。契約に従い、あなたに力を貸しましょう」

「ならば、我が名アイン・ソフ・オウルにおいて、この契約を守る事を誓おう」

宣誓の言葉に応じ、契約書が光り輝く。そして、炎に包まれると一瞬にして燃え尽きた。

契約内容は二人の魂に刻み込まれ、追記も変更も決して出来ない存在となつたのだ。

「では、これからよろしく頼むぞ。……俺の事はオウルと呼べ」

「はいはい。わたしはリルでいいわ……よろしくね、オウル」

変なのと関わっちゃった気もするけど。

その言葉を、リルは辛うじて飲み込んだ。

魔法陣を越えて、互いの手が握られる。

こうして、二人の迷宮作りの日々が始まった。

「それでさつきから気になってたんだけど」

狭い魔法陣を抜け出し、手足と翼をぐつと伸ばしながらリルは背後を振り返る。

「コレ、何？」

その視線の先に佇んでいるのは、巨大なガラスの瓶。

リルを呼ぶ前にオウルが設置したものだ。

「それは……そうだな。ダンジョンコアとでも呼ぼうか。これからのダンジョン作りにおいて核となるものだ」

説明しながら、オウルは短く呪を唱えて掌に小さな炎を灯し、部屋の四隅に浮かべて明かりにした。

「『魔力』とは何かわかるか？」

問うオウルに、リルは頬を膨らませて答える。

「馬鹿にしないでよね、これでもわたしは悪魔よ？ 魔力は全ての『魔』に関わるものの根源。魔法も、魔物も……そして勿論、わたし達悪魔もそれを源にしてる。『創造主』が作り上げたこの世界を僅かでも捻じ曲げ、汚し、作り変えるもの。それが『魔』であり、魔力であり、悪魔って訳よ」

リルの言葉に納得した様子で、オウルは頷く。

「ではこれは知っているか？ 魔力というのは、土や大気、水、生き物……ありとあらゆるものに内在しているが、その大部分は地中に存在する。地中の魔力は一つところに留まっている訳ではなく、道や河のように流れている。この魔力の道を龍脈という」

「……で、それとこれと何の関係がある訳？」

説明を理解出来たのか出来てないのか良くわからない表情で、ペタペタとダンジョンコアを触り

ながらリルは問う。

「今いることは、その龍脈の真つ只中だ。そして、このダンジョンコアはその龍脈の魔力を吸い上げる事が出来る」

炎の明かりに照らされ琥珀色に輝きながら揺れる液体を、リルは目を丸くして見つめた。

「え、もしかしてこの水……魔力、とか？」

「そうだ」

「嘘でしょお!？」

頷くオウルに、リルは素っ頓狂な声をあげる。

「液体状になるくらい濃度の魔力なんて、並みの魔術師じゃ振り絞っても一滴、二滴がいいところじゃない！ こんな量、人間の魔術師が扱える量を遥かに超えてるわよ……それに、こんなに近くにあるのに全然魔力の匂いがしないってどういう事？ ちょっとしたマジックアイテムだつて匂いですぐわかるのに、こんな量の魔力が傍にあつて匂いがしないなんてある訳ないじゃない」

「匂いでわかるのか？ 悪魔というのも便利だな。……簡単な話だ。この瓶は完全に内部に魔力を閉じ込められるようになってる。全く外に魔力が出なければ、匂いもする訳はない。これだけの魔力を人の身に宿そうものなら瞬時に正気を失うだろうが、瓶に入れて必要な分だけ使うのならば何の問題もない」

リルは思わず、オウルの顔とダンジョンコアを交互に見比べる。

「完全に魔力を遮断して……凄い技術ね。そんな事が本当に可能なの？」

「ああ。我が七十年に及ぶ研究の集大成だ。ようやく、ここまで漕ぎ着けた」
感慨深そうに言うオウルに、リルは感心したものが呆れたものかしはし悩み、やがて後者を選んだ。

「七十年で、あなた本当は何歳よ……まあいいわ。大体納得した。こんな濃度の魔力を無尽蔵に得られるなら、それこそ世界を統べる事も可能かもしれない。この瓶を守らなきゃいけないから、ダンジョンを作るのも……で、ダンジョン作りってまずは何から始めるの？」

「そうだな……まずは後ろを向け。そして、手をその壁についでくれ」

「？ ……こう？」

リルは言われるままにオウルに背を向け、壁に両手をつく。

「ねえ、この体勢ってまるで……あっ!？」

言いかげ、リルは己を貫いた感覚に高く声をあげた。

後ろから、オウルがリルの服をずらし、そのままリルの秘部を貫いてきたのだ。

「なんだ？ まさか生娘だったなどとは言わんだろうな」

「な訳ないでしょ！ ……もうっ、するんならするってちゃんとやってよね」

言葉こそ批難がましいが、声は既に甘く蕩けている。

「何もせずに突っ込んだのに、随分濡れているな」

「そりゃ、……んっ……淫魔、だから……ねっ……あ、そこ、いい……っ」

リルのそこは、何時間も愛撫したかのようにぐっしょりと濡れそぼっていた。

快楽を感じているから……では、ない。それが淫魔だからだ。

いつでも性交を行い、どんな男でも満足させるように身体自体が出来ている。

「でも、意外ね……ん……っ、わたしを、呼びつけて……は、あ……いきなり、ダンジョン作れなんて言うから……こういう事、興味ないのかと思った……」

「それは誤解だ。確かに、今交わっているのはダンジョン作りの一環ではあるが、それはそれとして俺はセックスに興味がない訳ではない。いや、むしろ大いに興味があるぞ。折角迷宮を作り、力を入れて富も女も求めないでは何の意味もないだろう？」

「なにそれ……ふふ、は、あ……エッチしたいから……んっ……ダンジョン、作るって……訳？」
喘ぎ声をあげながらクスクスと笑うという技を見せながら、リルはくるりと身体を回転させた。脚を大きく広げ、正常位のような格好になる。身体を支えるものがないのに空中でこのような格好が出来るのは悪魔ならではだ。

「でもいいわ……そういう事なら……んふ……たつぷりとサービスしてあげる」

リルは申し訳程度に肌を覆っていた服を脱ぎ捨て、その豊富な双丘をオウルの顔に押しつける。それと同時に、奥までオウルの一物を咥え込んだ膣内を蠢かせた。

「く、う……淫魔と交わるのは初めてだが……流石に凄いな。魂まで……搾り取られそうだ」

「んふふ……ありがと。あなたのも大きくて硬くてとっても素敵……んっ、契約さえなければ、このままカラカラになるまで、搾り取っちゃうところなんだけど……ね」

空中で腰を上下させながら、文字通り搾り取るようにリルは膣を蠢かせる。

男の精を搾り取る事をその生業とするサキュバスにとって、そこは身体の中で最も自由に動かせる器官と言っている。若返らせた肉体の影響もあいまって、オウルの限界はすぐそこまで近づいていた。

「随分と、余裕だな……」

「そりゃ、サキュバスですから……あん………もつと、泣き叫んで嫌がる方が好みだった？」
淫魔にとって性交は食事に等しい。勿論それは彼女にとっても快樂ではあるのだが、人間のそれと違い、完全に制御出来るものだ。その快樂に流されて我を失ったり、気をやっってしまうような事はありえない。

「そんな白々しい演技はいらん……くっ、いくぞ……!」

「うん、来て……! 中に、あなたの中に出して……っ!? え、ちよつと、嘘! 何これ……あつ、あああああああああつ!!」

リルの中でオウルは精を放つ。それに一瞬遅れ、リルは声をあげながら身体を震わせた。

今までの作り物めいた嬌声ではない。

「な、何、今の……?」

「悪魔の肉体は、常にこちらの世界とは隔絶された魔界にあるらしいな」

未だ繋がったまま、おもむろにオウルはリルの胸を揉みしだく。

「え、あ、ちよ、何、なんなのこれえ……」

初めての感覚に戸惑いながらリルは身をよじらせるが、オウルの片腕は彼女の腰をしつかりと抱

「駄目、もう、ああっ、もつと、いや、あ、あ、ああああっ！」

自らの中に入り込んでくる精液の感覚に、リルは身体を仰け反らせびくびくと震える。

もはや彼女にとつて、オウルの精液は強力な媚薬に等しい。身体に触れるだけで強烈な快感が身を貫き、膣内に出されればそれが絶え間なく襲いかかってくる。その上、オウルは出しても出しても全く萎える事なく、更に抽送を繰り返すのだ。

「ま、待って、おか、し……おかし、く、なっちゃ……」

「犯して欲しい？ ……是非もない、契約した記念だ。今晚は一晚中可愛がつてやろう」

「ちが、あ、んっ！ ちがぁ、う、あぁんっ！」

地下迷宮とはとても呼べぬ何もない地下の一室に、女の艶めかしい嬌声が響き続ける。

……そうして、一日目の夜はふけていった。

HOW TO BOOK ON THE DEVIL
DUNGEON INFORMATION

ダンジョン解説

【階層数】

1階層

■瘴気：0
■悪名：0
■貯蓄魔力：5（単位：万/日）
■消費魔力：0.1（単位：万/日）

new dungeons 新しい施設 installations

【ダンジョンコアLV2】

人間大にまで巨大化させたダンジョンコア。魔力を100万程度まで貯蔵する事が出来る。
ちなみにプロログでオウルが首から下げていた状態がLV1である。

new dungeons 新しい戦力 potential



オウル

▶戦力：3

老いた魔術師。魔術によって二十歳前後まで若返っている。かなり高度な魔術を操り、特に魔力制御は世界でも有数の腕を持つが、戦闘に関しては素人同然である為、戦力LVはさほど高くない。



リル(サキュバス)

▶戦力：2
▶消費魔力：0.1
▶最大貯蓄魔力：10

女性型の淫魔。幻惑、変身、魅了、精气吸収等の特殊能力を持ち、簡単なものであれば魔術も使用出来る。頭はいいがあまり強くない。

current 現状のダンジョン situation

施設はダンジョンコアのある部屋のみ。ダンジョンというより、洞穴と言った方が近い。
防衛設備は一切なく、ダンジョンを見つけさえすれば簡単に踏破出来るだろう。
ただし、現時点でその位置を知る者はオウル以外にいない。

Step. 1 近隣の村を襲撃しましょう

1

「ううう、死ぬかと思った……」

体中精液にまみれ地面に突っ伏しながら、リルはオウルに恨みがましい視線を向けた。

「馬鹿を言うな、情交で死ぬ淫魔などというものがいる訳がないだろう」

それに対し、オウルは何十回と精を放ったにもかかわらず疲れた様子もない。

「あなた、化け物？ 一体何回出したのよ……」

「良かっただろう？」

ニヤリと笑みを浮かべるオウルに、ぷいとリルは目を背ける。初めて味わう快感に腰砕けになり、力も入らないリルをオウルは一晚中犯し続けた。膣は勿論、口や尻の穴にも幾度となく精を注ぎ込み、リルが動く体力もなくなつてからは体中に精を放ち汚した。

行為自体に不満は全くない。そもそも契約自体に好きな時にリルを抱く事は入っていたし、そうでなくとも性愛を生業とする淫魔である。むしろ、今まで感じた事もない快楽を味わえた事は彼女にとって非常に大きな感動であり、喜びであった。

しかし、魔力で無理やり感じさせられた上に、人間にいいように身体を弄ばれたという事がリルの淫魔としての自尊心を傷つけたのは確かであり、素直に良かったと認める気にはなれなかった。

「まあそう拗ねるな。何も無為にお前を弄んで楽しんだという訳ではない。これも大局的な目で見ればダンジョン作りの一環だ」

「……なんでこんなのがダンジョン作りの一環になるのよ」

ようやく体力が少しは回復し、リルは上半身を起こす。

「ダンジョンコアは龍脈から魔力を汲み取る。溜まっている量も汲み取る速度もまだ大した量ではないが、体力を回復させる程度の術であれば無制限に使える程度ではある。魔力で体力を補いながらならば、半永久的にお前とまぐわっている事も可能だ」

オウルは自身の異常な体力の種明かしをした。肉体の状態を数刻前に戻し、体力を回復する。衰えれば、再び数刻前に戻す。そうする事で、無限の精力を得ていたのだ。大量の魔力を消費する術ではあるが、若返る事に比べれば造作もない。

「が、それもこの迷宮内、ダンジョンコアのすぐ傍でだけの事だ。およそ三十フィート（約九メートル）以内。その距離にいなければ俺はコアから魔力を取り出す事は出来ん。そこで、だ」

オウルはリルの頭にぼんと手を置き、短く呪文を唱える。すると、魔力がリルの体内からオウルへと吸い込まれ、次に瞬く間にリルの身体に活力が戻り、ついでに身体に付着した精液が吹き飛んだ。

「このようにお前の身体に俺の魔力を精と共に仕込んだ。お前は悪魔だから、並みの魔術師の数倍

は魔力を溜めておけるな。移動出来る小型のダンジョンコアのようなものだ」

ピクリ、とリルのこめかみが引きつるように動くのに、しかしオウルは気付かない。

「今後、ずっとダンジョンに籠もっている訳にもいかん。が、俺の魔力だけではどうしようもないからな。しかし流石悪魔だな、許容量一杯まで魔力を溜めるのに一晩かかった。まあこれだけ溜めれば当分は大丈夫だろうが……」

「ふざけるなあっ!!」

オウルの言葉を遮り、リルは叫ぶと拳を振り上げた。

「あーもうこの馬鹿殴りたい！ 契約で危害加えられないから殴れないけど、すつごい殴りたい！」
「な、何故怒る!？」

オウルとしては必然性を説く事でフォローしたつもりだったが、その説明は火に油を注ぐものでしかなかった。ちょっと拗ねた、程度だったリルの感情は完全に怒りに燃えている。

男を誘惑し、情を交わす事が種としての存在意義と言ってもいい淫魔に対し、一方的に身体を蹂躪した拳句、ただ魔力タンクとして必要だったから、などと言いつつ放ったのだ。リルにしてみれば存在自体を全否定されたに等しい。

「煩い、あんたなんかゴブリンでも犯してなさいよ！ このダンジョン馬鹿、若作り爺！」

リルはひたすらに罵詈雑言をわめき散らした。契約で悪態は制限されていなかったからだ。人間に対してこんなに怒りを抱くのも、悪魔として生まれて初めてのことだった。

「という訳で、これからあの村を襲撃する。……いい加減機嫌を直さないか？」

オウルにとつては数ヶ月ぶり、リルにとつては前回人間に召喚された時から数えて数十年ぶりの地上。遠くに見える小さな村を指差し、オウルは相変わらず臍を曲げたままのリルにそう言った。

「別に機嫌悪くなんてない」

「明らかに機嫌の悪い声色で答えるリルに、オウルは内心ため息をつく。

流石にオウルも自分の行為ではなく発言が悪かったのだらうとは気付いていたが、だからといって機嫌を直すような気の利いた言葉は思い浮かばなかった。盛りのついた若い男じゃあるまいし、小娘の機嫌を取るのも馬鹿馬鹿しいのであまり気にしない事にする。見た目も言動も若い娘とはいえ悪魔は悪魔だ。機嫌で仕事の質を左右されるような事はあるまい。

「では、改めて確認をしよう。俺はある程度魔術を修めてはいるが、その研究の大半はダンジョンコアに費やされたものだ。魔力の取り扱いについては世界でも有数である自負はあるが、戦闘経験はほとんどないし荒事には向いていない。ただの村人に負けるような事はなからうが、ある程度の腕を持った剣士でも出てくれば少々辛い。つまり、お前だけが戦力という事だ。頼んだぞ」

「……いいわ、皆殺しにしてやる！」

凶悪な目つきをしながら唸るようにリルは答えた。八つ当たりされる村人達に若干の同情をしつ

つ、オウルは彼女を伴い、村への入り口へと向かう。

村の入り口には魔除け代わりの怪物の石像と、村娘らしき女がいた。

「よし、じゃあまず一人目……ってけふっ！」

オウルは早速襲いかかろうとするリルの首根っこを掴み制止する。

「なにすんのよ！」と抗議するリルを無視し、村娘に伝える。

「そんな娘よ。ここに長を連れてこい。邪悪なる魔術師、オウルが貢物を要求しに来たと。逆らえば死のみが待っていると知れ」

「……はあ？」

いきなりの尊大な物言いに、娘は怪訝な表情を浮かべる。まるきり気の触れた人間を見るような目だ。オウルは短く呪文を唱えると、炎の球を掌に浮かべ、村を囲む柵に向けて放った。

炸裂音が響き、粗末な木製の柵が粉々に飛び散る。そのまま別の柵に燃え移り、もうもうと黒い煙を吐き出した。

「二度は言わぬ。村全てを灰塵に帰したくなければ急げ」

オウルが低い声で言うのと、女は飛び上がるようにして村の奥に駆けていく。

「めんどくさいなー。問答無用で皆殺しにしちゃえばいいんじゃないの？」

リルが不服そうに物騒な事を言う。

「殺さない方が使えるからな。とはいえ逆らうなら容赦はせん。そしてこの村は、逆らうだろうな」

「何でそんな事わかるの？」

「まあ見ていろ」

ニヤリと笑うオウルに、リルは何やら嫌な予感を覚える。

しばらくして、村長と思しき壮年の男が杖についてやってきた。年齢は四十すぎ半ば。茶色い髪
のガッシリとした体格の男だ。

「お待たせしました、オウル様。何でも、貢物をご所望との話ですが……」

「ああそうだ。こちらの要求を呑めばよし、呑まぬならばこの村には灰になつてもらふ事になる」

「それはそれは恐ろしい……勿論、おさめさせていただきます……」

村長は頭を深々と下げ、祈りを捧げるように杖を両手で掲げた。

「……鉄の剣で良ければなッ！」

その杖が半ばから二つに分かたれ、中から現れた白刃が煌めいた。仕込み杖だ。

刃を引き抜くと同時に流れるように間合いを詰め、村長はオウルの首を狙う。完全に虚をついた、
必殺の一撃。しかし、それをオウルは難なくかわした。

「チッ、かわしたか……」

「リル、俺を守れ」

契約に基づいた命により、リルはオウルを庇うように前に出る。それとほぼ同時に、村長の背後
にも民家の陰からわらわらと武器を持った男達が出てきた。

「ちよつと！ どういう事よ!」

「端はなからこちらに従う気などなかった、という事だ。とはいえ、芝居が下手だな。お前のような五

十にもならん男が杖をついて歩いては、折角の暗器がバレバレだろうが」

前半はリルに、後半は村長に向けオウルが言う。

「ご忠言痛み入る。次からは気をつけるさ……アンタを殺した後でな！」

村長が剣を振るい、リルに襲いかかる。

リルは爪を剣のように長く伸ばし、それを辛うじて受け止めた。

「オウル、こいつ強い……！ あたしじゃかなわない、逃げよう！」

「駄目だ」

何とか剣を爪でいなしながら、リルはオウルにだけ聞こえる声で囁くが、返ってきたのは拒否の言葉だった。今は何とか凄いているが、村長の背後から走ってくる男達が増勢すればリルでは防ぎきれない。そもそもサキュバスは戦闘向きの悪魔ではないのだ。

それでも中級程度の格はあるからちよつと剣をたしなんだ程度の敵なら相手出来るが、この村長は明らかに手だれと言つていい腕だ。

キーン、と澄んだ音が鳴り響き、リルの爪が半ばから両断される。

「じゃあな、悪魔の嬢ちゃん。恨むなら馬鹿な主人を恨みな。すぐに同じところに向かわせてやるからよ」

村長が剣を振りかぶる。

「今だ、殺せ」

そして、灰色の腕がその胸から生えた。

「……え？」

リルが呆けたように声を出す。その場にいた誰もが状況を把握出来ず、呆然と動きを止めた。生えたのではない。村の入り口にあった守護像が動きだし、村長の胸をその腕で貫いたのだ。村長は声をあげる暇もなく絶命し、地に倒れる。

「後は戦闘の訓練も積んでない有象無象だ。任せたぞ、リル、ガーゴイル」
呆然とする人々を置いてオウルはその場を立ち去る。

その後は、一方的な虐殺が始まった。

「ねえ、いつの間にガーゴイルなんか置いたの？」

数十分後。動く者のいなくなつた村……いや、村の跡地で、リルはオウルに尋ねた。

「石像を魔力で動かしたのかと思つたら、あれ本物のガーゴイルなのね。びっくりしたわ」

ガーゴイルとは、ある意味で最も有名な悪魔の一種だ。翼を持った見るからに悪魔然とした醜悪な外見を持つ悪魔だが、最も特徴的なのは動いてないと石像と区別がつかない、というところにある。

その為、ガーゴイルを模した石像が多数作られ、盗賊への脅しや魔除けの像として扱われている。「もし本物だつたらどうしよう」と思うだけで、ある程度の抑止効果があるのだ。だがまさか、村長も自らの村を守っているはずの像に殺されるとは思つてもみなかつただろう。

「あれを置いたのは大体三十年前だな」

「は？」

予想外の答えに、リルは思わずあんぐりと口を開く。

「この近辺に龍脈がある事は五十年前には気付いていたから、足掛かりにする為に行商のフリをして売りつけた。『なんと精巧なガーゴイル像なんだ！』と喜んで買っていったよ。当然だ、本物のだからな。そして、そのガーゴイルを通じて今の村長の実力や気風は知っていた。あいつは元冒険者で、昔はそこそこの名知れた剣士だったそうだ。素直に従う訳がないから、殲滅しやすいように集まってもらった訳だ」

「なるほどね……本当、あんた嫌になるくらい周到で狡猾ね」

「誉め言葉と受け取っておこう」

面白くもなさそうに答え、オウルは魔術の準備を終える。それは巨大な魔法陣だった。

村の中央に描かれた円形の陣の上に、村人達の死体が累々と積みあげられている。

「さて、始めるか。この数は少々億劫だ。魔力をもらうぞ」

言うや否や、強引にリルを抱き寄せ唇を奪う。リルは少し嫌そうにするが、抵抗はしない。

「……一応いっておくが、魔力を取り返すなら手を握るだけでもいいからな」

「あーそーですかー」

どうでも良さそうに言葉を返すが、視線をこちらに寄越さないという事はまんざらでもなかったのだから。

ようやく多少は機嫌が直ったか。面倒な事だ……と内心思うが、オウルにとって意外な事に、そ

れは思ったほど不快でもなかった。

オウルは口付けが最も効率良く魔力を取り返せる、という説明はしない事にして、魔法陣に向き直り、居住まいを正すと、長い呪文の詠唱を始めたのだった。

3

「さて、これで一応の戦力が整ったな」

目の前に立つ老若男女を見、オウルは頷く。年齢も性別もバラバラなその集団は、やはりバラバラに剣だの棒切れだの農具だの、武器になりそうなものを手にしている。

共通しているのはただ一つ、「皆死体である事」だけだ。彼らはいわゆる動く死体リビングデッドであり、オウルの魔力で仮初の命を吹き込まれた生ける屍である。

「あなた、本当に他人を信用してないのね……」

周りを見渡し、リルは呟く。ガーゴイルは契約によってオウルに完全服従を強いられている。命令された事だけを忠実にこなし、命令されていない事は決して出来ない。中級以下の悪魔と契約する時には良くある種類の契約だ。

死体達にはそもそも自我さえ存在しない。オウルの魔力によって動いているだけの操り人形だ。唯一自由意志を持つており、ある程度自分の意思で動けるリルも、やたらに細かい契約によって出来る事は限られている。

その徹底した対応に、過去に何かあったのだろうとリルは当たりをつけたが、それに対して詮索はしない。オウルの事を慮おもんばかつたのではない。契約に「過去を詮索しない」という条項があるからだ。

「では、次の村に行くか」

リルの呟きが聞こえなかったのか、それとも聞こえたが無視しているのか。

オウルは呟きに答える事なくそう言った。

「次？ まだ村を襲うの？」

この村にあった食料や金品はそれぞれ持てるだけ死者達に持たせてある。それほど豊かな村ではないとは言え、冬が近いせいか膨大な量だ。悪魔であるリルに人間の食事は必要ないし、オウル一人には十分すぎる量がある。

「いいや、むしろここからが本番だ」

ニヤリと笑みを見せるオウルに、リルは額に手を当てた。まだ丸一日程度の付きあいだが、この笑みを見せる時のオウルは大体ろくでもない事を考えているとわかってきたからだ。

空間自体が破裂するかのような独特の轟音と共に、稲妻が地面を焦がす。

天気は雲一つない晴天。雷どころか雨さえ降りようのない状態で落ちた稲妻は、オウルの魔術によるものである。

魔力を食う割には攻撃範囲も狭く、威力もそれほど高い訳ではない。生物を殺すには十分であるが、石や岩といった無生物にはほとんど効果がないのだ。そんな使い勝手の悪い魔術であるが、相

手をただ脅すのにはかなり有効な術だった。

突然の雷鳴に驚き、村人達が何事かと家から出てくる。そこで目の当たりにしたのは、灰色の口―ブに身を包んだ怪しい男と、申し訳程度の衣装に身を包んだ女、そして、血だらけの軍勢だった。

「良く聞け。我が名は邪悪なる魔術師、オウル」

「さつきも思っただけど、邪悪なる魔術師って自称するのはどうなの？」

「煩い。こういうのはわかりやすい方がいいんだ」

小声で突っ込みを入れるリルに、やはり小声で言い返す。

「今日は貴様らに『取引』を持ちかけに来た」

とりあえずオウルは、すぐ目の前にいる一番年嵩の男に向けて話を進める。

「と、取引……ですか……？」

先ほどの村に比べ、こちらの村はかなり及び腰だ。前の村の村長のような手だれがない事もあがるが、オウルの背後に控えるアンデッド達の存在も大きい。

「そうだ。我に月に一度食料を、そして年に一度美しく清らかな乙女を捧げよ。さすれば、我が祝福を汝らに与えよう。作物は凶作に見舞われる事なく、狼も小鬼も盗賊も汝らを脅かす事はなくなるだろう」

リルが意外そうな顔をするが、それは無視する。

「その……もし、取引に応じなかつたら……？」

恐る恐る尋ねる村人に、オウルは軽く手をあげる。その合図と共に、背後の死者達が数歩前に出

た。

「この者達は、取引に応じなかった愚か者どもだ」

「——ゲオルグさん……!」

中でも『村長だったもの』の顔を見て、村人達の何人かが声をあげる。

「あのオッサン有名人だったんだね」

「あの程度の規模の村にしては破格の腕だ。さもあるう」

オウルはリルの呟きに答えてやる。

「我に敵対するならば、待つのは死などという生ぬるいものではない。——果てなき永遠の苦役だ。しかし、取引に応じるならば汝らは百年の豊穡を得よう。差し出す食料よりも豊かな実りを。差し出す娘よりも多くの身の安全を約束しよう。さて、汝らが長は賢き者か？ それとも愚かなる者か？」

村人達は顔を見合わせたが、答えは大体決まっているのだろう。

さほど揉めた様子もなく、彼らはオウルに恭順を誓った。

「良いだろう。ならば村の中央に祭壇を作り、毎月一日に供物を捧げよ。供物は牛を一頭、豚を二頭、鶏を五頭。作物はその月に取れた種類全てを、五分ずつ捧げよ。娘も同様に、竜の月の一日に祭壇に待たせよ。良いか、娘は美しく、男をまだ知らぬ清らかな乙女でなくてはならん」

「ほんつと細かいなあ……」

ぼそりとリルが呟くが、これはまた無視。

その後、監視と護衛の為にガーゴイルを村の中央に置き、田畑に豊潤の呪いをかけ、祭壇の作り方について簡単に指示を残すと、オウルは死者達とリルを連れて村を後にした。

「ふう……ここに帰ると落ち着くな」

その後数日をかけて近隣の村を幾つか回り、同様の契約を結んだ後オウル達はダンジョンへと戻ってきっていた。

結局最初の村以外は抵抗する者もなく、全部で六つの村と契約した。多少遠い村もあるが、ダンジョンコアの魔力を用いて転移の術を使えば問題ない。村人達に作らせた祭壇は転移の術の目印でもあった。

滅ぼした村から持ち込んだ家具で殺風景だった一室も随分落ち着いた空間となり、オウルはソファにゆつたりと身を沈めた。

「でも、ちよつと意外だったな。てつきり全部滅ぼして奪い尽くすのかと思ってたから。逆に魔力を分け与えて、生活を保障してあげるなんてね」

実際そうしたところで良心の呵責を覚える訳ではないが、ある程度村人達の事も氣遣ってやるのはリルにとつても好ましい事だった。悪魔といえども、別に破壊と殺戮の化身という訳ではない。

「そんな事をすれば幾つ村があつても足らんからな。人間が家畜の世話をしてやるのと同じだ。奴らが飢えて死に、生活も出来なくなれば、こちらにも実入りがなくなる」

「ああ、なるほどね」

家畜と同じ、という説明はリルにとつてはしつくり来た。悪魔から見た人間はちょうどそんな感じの存在だからだ。自分にとつて益になる存在だから無闇に殺すのは気が進まないし、無抵抗の者を殺すのには若干の抵抗を覚えるが、自分に牙を剥く者であれば殺す事に何の躊躇いもない。

「オウル、あなた本当に悪魔以上に悪魔みたいね」

「……誉め言葉と受け取っておこう」

多少無然とした表情でオウルはソファから腰をあげ、ベッドへと移動する。

「まだまだやらねばならん事は山積しているが、とりあえずは一仕事終わったな。今日はそろそろ休むでしょう。……来い」

「『当分は必要ない』んじやなかったの？ それにどうせ、すぐ若い娘が来るんでしょ」

そう言いつつも、命令は聞かない訳にはいかないでリルはベッドに近づく。

やれやれ、まだ臍を曲げているのか……と、オウルは内心嘆息するが、表情には出さない。

「最初の娘が来るのは二週間後だな。まあ、抱く為だけに処女を要求した訳でもないが」

ベッドに横たわったまま腕を強引に引つ張り、オウルはリルを腕の中に収めた。

契約した村は六つ、それぞれ娘を捧げる月をずらしたので、二ヶ月に一度は新しい娘が届く事になつている。

「お前に溜まつている魔力はまだ十分だがな、こちらにも『溜まつた』ものはある。それに……情交の為にだけ存在するお前達夢魔より抱き心地のいい人間など、いる訳がないだろう」

慣れないリップサービスを口にする、リルがニヤニヤしながらオウルの顔を見ていた。

リップサービスと言っても事実ではあるが、言わなくていい事をいちいち言わされているというのはオウルにとつては若干の屈辱でもある。

「それに、魔力で出来ているお前の身体は、魔力を注げば僅かずつだが容量も増える。そもそも容量自体が人間とは段違いなのだ。これからも頻繁に相手をしてもらうから、覚悟しておけ」

「はあい、……ご・主・人・様」

耳元でくすぐるように囁くリルを押し倒しながら、オウルはもう一度心中で嘆息した。

全く、面倒な悪魔をパートナーに選んでしまったものだ。

リルも、似たような感想をオウルに対して抱いている事には気付かないまま。

4

「はあ……気持ちよかった」

まるでひだまりの中でまどろむ猫のように弛緩しきった表情で、リルはごろんとベッドに横になった。股間の穴からはごぼりと白濁した液が零れ落ち、前回よりも更に全身精液にまみれているが、前回と違って身体が動かないほど疲労はしていないようだった。

「……随分と余裕そうだな。魔力が効かなかったか？」

「そういう訳じゃないよ。何回もイカされたし……」

言いつつも、リルは体勢を変えると「綺麗にするねー」と呟き、オウルのを口に啜える。

「ただ、下手に抵抗せず受け入れたから大分楽だったかな……それに、前と違ってベッドの上だったから体勢とか気にしなくて良かったし」

舌を伸ばしてオウルの一物を舐めあげながらも、リルの言葉は明瞭にオウルの耳へと伝わる。サキユバスにとつて舌や口は発声器官ではなく、口淫の為に存在するもののだそうだ。

「あは、おつきくなってきた……えつと、それにオウルが精と一緒に魔力をわたしの中に入れてるでしょ？ 生気は許可がなきゃ吸っちゃ駄目って契約にあるから吸ってないけど、魔力はちよつとだけ吸っちゃったんだ。それで大分体力楽かも」

「……なんだと？」

横たわったままリルの奉仕に身を任せていたオウルだが、その言葉に思わず上半身を起こす。

「ちよ、ちよつとだけだよ!! 契約がないからってその辺はちゃんとわきまえて……」

慌ててリルは弁明する。そうしつつもオウルの股間から口を離さないのは流石淫魔といったところか。

「……普通、他人の魔力というのは悪魔でもそう簡単には吸えん。魔力、魔力と一括りに言ってるが、大気や地面に散らばる『Mana』と、生物の持つ『オド』では性質がまるで違う。ダンジョンコアで集めているのも、お前の中に放っているのも俺専用の『オド』だ。俺以外がそれを扱うには、一度Manaまで戻してから、自分専用のオドにせねばならんはずだが……」

「あー、なるほどね。なんかわたしとオウルの魔力って性質近いみたいで、そのまま吸えたよ。こういうの、相性いいって言うのかな？」

事も無げに言い、リルは仕上げとばかりに喉の奥までオウルの一物を飲み込んで舌を絡ませる。

「俺の魔力は琥珀色だぞ？ 普通、悪魔の魔力は黒とか紫とかだろうが……く、出すぞ……！」

「ん、美味しい……オウルって性格は悪いけど、精はすごく美味しいよね」

こくこくと喉を鳴らして精液を飲み下し、更にストローのように吸い上げながらリルは満足そうな声をあげる。

「余計なお世話だ。……まあ魔力を共用出来るなら、それはそれで使えるな。お前に注ぎ込んだ魔力のうち、一割程度なら自分のものにしていい」

オウルは汗や精液、愛液にまみれたベッドから身を起こすと、軽く濡れた布で身体を拭い、服を着込む。

「そのうち湯殿なんかも用意せんとな。……が、今は先にやらねばならん事が幾つかある」

オウルはリルを呼んだ時と同様に血で魔法陣を幾つか描く。と言ってもリルを呼んだそれとは違い、かなりシンプルなものだ。

「一応ダンジョンが出来て、家具も揃って、定期的に食料とかも手に入って……他に何かやる事あるの？」

とりあえずベッドのシーツを剥ぎ取り、予備のものに交換しながらリルが尋ねる。

「馬鹿を言うな、やる事はまだまだ無数にある。これだけでいいなら、わざわざお前を呼んだりしない。……いでよ、インプどもよ！」

オウルが一喝すると、魔法陣から小さな悪魔が数匹湧くように現れた。人間の赤ん坊くらいの大

きさしかないその悪魔は、しかし赤ん坊の持つ可愛らしさとは無縁の生き物だった。全身はつるりとして毛は全くなく、背中には蝙蝠を思わせる翼が生えている。耳は禍々しく尖り、顔は醜悪でよしま邪な笑みを浮かべていた。

最も位の低い悪魔の一種だが、それでも悪魔は悪魔。簡単な魔術くらいなら使用し、人並みの知能も備えているので魔術師に使い魔として良く使用される。

「まず、このダンジョンを大きく拡張せねばならん。インプどもよ、この地図の通りにダンジョンを掘るのだ」

オウルはあらかじめ用意しておいた地図をインプ達に渡して指示する。インプ達はすぐさま作業に取りかかった。

「ダンジョンの拡張には二つの意味がある。侵入者対策と、収集する魔力量の増大だ」

汚れたシーツのやり場に困っているリルからシーツを奪い、代わりに地図の写しを押しつけ、オウルは説明する。

「今、このダンジョンは地上の穴からこのコアのある部屋までほぼ直通の道が通じている。ここを探し当てる為に、俺が真っ直ぐ掘ったからな。これでは侵入者がいた場合、すぐにこの部屋を攻められる事になるが、これは非常にまずい。ダンジョンコアが壊されれば全ては終わりだ。そう簡単に辿りつけぬように、ダンジョンは複雑な迷宮にしてやる必要がある」

「……そもそもこの部屋には入れないように、壁で囲っちゃえばいいんじゃない？」

素朴な疑問を口にするリルに、オウルが首を横に振る。

「それが出来んのが二つ目の理由だ。このダンジョンは龍脈の真つ只中に存在しているが、そこにコアを置けば勝手に魔力が溜まるという訳ではない。ダンジョンの通路に魔術的な彫刻を施し、周辺の魔力を通路を通してコアへと流し込むようになっていて。ちようど、植物が根を伸ばし、地中の養分を取り込む事に似ている。ダンジョンを広げれば広げるほど、大量の魔力がコアへと流れるという訳だ。コアを隔離すればそれもかなわん」

「あー、なるほどね。ダンジョン自体が立体的な魔法陣みたいになってるんだ」

「飲み込みが早いな。『みたい』ではない。実際、これは魔法陣なのだ」

凶や模様には意味があり、意味には力がある。

魔法陣とは、模様の意味を利用する魔術の一種だ。たとえば、『凹』には『内と外の区別』という意味があり、凹だけで進入を拒む最小の魔法陣となる。

オウルが作るうとしているのは、それを途方もなく発展させたものだった。壁に魔法陣を彫り込み、更にその壁自体も全体を見渡せば魔法陣となる。

更に、通常の魔法陣とは違い平面的なものではなく、地下のダンジョンで作る事で立体的な魔法陣を構築するのだ。

「へー……器用な事考えるのね」

「何を他人事のように言っている？」

地図を見て感心するリルに、オウルは呆れてため息をついた。

「お前を呼んだのは性欲の捌け口の為だけではないぞ。この設計も、お前にやつてもらおうのだ」

「はあ!? 無理無理無理無理、絶対無理! これってあれでしょ? 魔力を澁まないようにちゃんとコアに届けつつ、侵入者には予測出来ないような迷宮にしなきゃいけないでしょ!」

「ついでに、迷宮全体に防衛効果を持たせたり、魔物どもが暮らしやすいよう、部屋の数や大きさにも気を配る必要があるな」

「更に難易度があがってるじゃないの!? 絶対無理だつてば!」

「心配せずとも、一朝一夕にやれとも一人で全てこなせとも言わん。俺の下で学び、小さい単位から徐々に仕事を学んでもらう」

地図を改めて見返し、リルは眉根を寄せる。悪魔は人間と違って理論に従って魔術を使っている訳ではない。しかし、基礎的な魔法陣の意味くらいは読み取れる。

オウルが設計したその緻密さは、彼女の目から見ても途方もないものだった。

「まさか魔術の勉強をさせられるとはね……そりゃまあ契約だからやるけどさ、あんまり期待はしないよね?」

「これを見て困難さを理解出来ているなら、問題ないだろう。知とは『何を知っているか』より、『何を知らぬか』を理解している事の方が肝要なのだ。お前ならいずれ出来るだろう」

真っ直ぐ見つめて言うオウルに、思わずリルは視線を逸らす。

「まあ、やるだけはやってあげるわよ、使い魔だし……」

オウルは頷き、ニヤリと笑みを浮かべるとぼんとリルの両肩に手を置く。

「では、まず簡単な練習から始めようか」

この笑みは……と、リルが気付いた頃には、もう遅かった。

「うう、臭い……」

リルは壮大に顔をしかめながら、ごりごりと小刀を動かす。

ぐにやりとした嫌な感触と、べとべととした血や脂が手を汚し、全身酷い有様になっていた。

彼女は動く屍となった元村人達から、肉を剥ぎ取る作業の真つ最中だ。

「あまり骨を傷つけるなよ。肉はしっかりと取り除け、残れば残るだけ邪魔になるからな」

「こんなの燃やしちゃえばいいんじゃないの!？」

「駄目だ。燃やせば骨も脆くなつて使い物にならん。良質なスケルトンを作りたければ、やはり手で肉を取り除くしかない」

リルに課した『勉強』のその一は、スケルトンの作成だった。リビングゲッドは死体さえあれば簡単に作れるが、動きは鈍くあまり強くない。幾らダンジョンを複雑な迷宮にしても、そこを守るのがこれでは何の意味もない。肉を全て取り除き、骨に呪文をかけた『動く骨』であるスケルトンもそれほど強い訳ではないのだが、それでもリビングゲッドよりはかなり動きが速い。

死体の筋肉は機能しない為、ついていてもただの重りにしかならないのだ。勿論、防具の役割はするのでリビングゲッドに比べれば耐久性に若干の難はあるのだが、そもそもリビングゲッド自体大して耐久力がある訳ではない。

人間並みの速度で動けるスケルトンの方が防衛に向いているのは明白だった。

「肉を取り除いたら、骨に魔法陣を彫り、動くようにしろ。間接部分に魔力を流すように彫るのだ。擬似知覚をつけるのを忘れるなよ、めくらのスケルトンを作っても仕方ないからな」

死体の肉を綺麗に剥ぎ取って骨だけにし、魔法陣を彫り、次の死体に取りかかる……
死体は小さな村だったとはいえ数百体はいる。

「では、俺は別の仕事に取りかかるからな。サボらず作業を続けておけよ」

「ちよっ、待っ……ちよっくらいい手伝いなさいよこの馬鹿主人——っ！」

暗い洞窟に、リルの叫び声が響いた。

HOW TO BOOK ON THE DEVIL
DUNGEON INFORMATION

ダンジョン解説

【階層数】

1階層

■瘴気：1
■悪名：1
■貯蓄魔力：7（単位：万/日）
■消費魔力：2（単位：万/日）

new dungeons 新しい施設 installations

【寝室LV1】

村から強奪してきた家具で一応寝室としての体裁を整えた部屋。セックスしても身体が痛くならない。

【キッチンLV1】

村から強奪してきた食器や調理器具で一応台所としての体裁を整えた部屋。料理は主にオウルが作る。

【水洗トイレ】

邪悪なる魔術師といえども食事をすれば出すものは出す。地下水脈を発見したので、それを利用して水洗トイレを作った。流れる、というか流れっぱなし。落ちると生命が危うい。

new dungeons 新しい戦力 potential

ガーゴイル

- ▶戦力：5
- ▶消費魔力：0.1

石像のような姿をした悪魔。悪魔としては下級から中級程度に分類されるが並みの魔物よりはよほど強い。頑強な肉体と自由に宙を飛びまわる羽、鋭い爪で戦う。魔術は使えない。

リビングデッド
動く死体

- ▶戦力：2

村人の死体に魔術をかけ、動かしているもの。十体程度の集団でこの戦力。雄魚と言っている。

インプ

- ▶戦力：1
- ▶消費魔力：0.01

悪魔の中でも下級中の下級。契約とが深く考えずに魔力で幾らでも従えられるのだけが強み。ごく簡単な魔術を使うが、ぼんやり歩いている人間を転ばせる、とか馬を驚かせる、程度の悪戯レベルでしかないので、戦力には数えられない。

current 現状のダンジョン situation

ダンジョンコア周辺にいくつか部屋が出来たが、まだ防衛設備はほとんどない。リビングデッドは一部が入り口付近で見張りをしているものの、大半はリルが突貫作業でスケルトンに改造中である。

Step.2 愚かな侵入者を調教しましょう

1

「オウール……」

地獄の底から響くような声をあげ、よろよろとリルが姿を現す。

その身体は全身血まみれで、凄まじい異臭を放っていた。

「どうした。仕事は終わったのか？」

「終わったわよっ！ ああもう体中どろどろで気持ち悪いったら！」

振り向きもせず問うオウルに怒鳴り返すリル。すると、オウルは意外そうにリルに視線を向けた。

「もう終わったのか。思ったより早かったな」

オウルがリルにスケルトン作りを命じてから、既に三日が経っていた。数百体はある死体の肉を削ぎ、骨に魔法陣を彫ってスケルトン化する作業だ。途中で作ったスケルトンに手伝わせる事に気が付いたとしても、一週間はかかるだろうとオウルは見ていた。

「なんかゴブリンが沢山迷い込んできたから、魅了して手伝わせたの。それよりこれ何とかしてよ」
リルは血と脂でどろどろになった身体を示して言った。

ゴブリンというのは、身長四、五十センチほどの小さな鬼の一種だ。見かけは醜悪で力も弱いが大勢で群れるし手先は器用なのでそういった手伝いには確かに最適だろう。

「そちらも思ったより早いな。いいだろう、こつちについてこい」

「いつもみたいに魔力で吹き飛ばしてくれればいいんだけど……って、何これ!!」

ぶちぶち言いつつもオウルの後をついていくリルは、眼前に広がった光景に目を見開いた。

十メートル四方ほどの大きな部屋の中央には大きな穴が掘られ、そこにはなみなみと水が満たされていたのだ。

「地下水脈を見つけてな。ここに引いてみた。少し待ってろ……ゴーレム! 岩を水の中に入れて!」

オウルが命じると、部屋の片隅に鎮座していた石の像がゆつくりと立ちあがる。

ガーゴイルに似ているが、存在としてはむしろリピングデッドの方が近い。オウルの魔力によって仮初の命を与えられた岩の人形、ゴーレムである。

ゴーレムは部屋の隅で盛大に焚かれていた炎の中に手を差し込むと、赤く焼けた大きな岩を取り出した。人間であれば重篤な火傷は免れえないところだが、岩で出来たゴーレムには何の影響もない。

そして、そのまま赤く焼けた岩を人工の泉の中に放り込む。じゅわっ! と音がして湯気を立てながら、岩は泉の底に沈んでいく。二、三放り込むと、泉の水はちょうど良い温度になった。

赤く焼けた岩はそうそう冷たくなる事はない。が、泉の水は水源から流れてくる水と徐々に入れ

替えられるので熱くなりすぎる事もない。ここ数日でオウルが調整し作った自慢の湯殿だった。

「お風呂作ってくれたんだ……」

胸の前で手を組み、リルは感激に目を輝かせた。オウルは「別にお前の為じゃない」という言葉を飲み込む。実際、リルが仕事を終えるのはもつと後になるだろうと思っていたのだから、リルの為であろうハズがないが、いちいち言う事でもない。

「……まあな。ゴーレム、新しい岩を焼いておけ。さて、では入るとするか。先に桶で身体を洗い流せよ」

「あれ？ オウルも入るの？」

桶を受け取りながら、リルは尋ねる。

「ああ。悪魔とはいえ、三日も飲まず食わずで疲れただろう？」

オウルの意味するところを理解し、リルはにっこりと笑う。

「じゃあ……お湯とお食事、いただきます」

数分後、大きな部屋に嬌声が響き渡った。

「はー……気持ちいい」

ゆつたりと湯につかりながら、満足そうにリルは呟く。

彼女は汚れを湯で洗い流した後、オウルからたつぷりと精を注がれ、今はのんびりと湯の温度を楽しんでいた。

「そういうえばゴブリンが来たと言っていたな。仕事を手伝わせた後はどうした？」

湯に入ってリラックスしているのか、こちらもいつもよりほぐれた表情でオウルが尋ねる。

そういうえば、会った頃からどこかギラギラとした、張り詰めた表情だったな、とリルは思う。焦っているという訳ではないだろうが、オウルは意識していかめしい表情を作っていた気がする。

湯につかり、リラックスしているオウルはどこにでもいる若者のように見えた。

と言っても、中身は七十を遥かに越える老人なのだが。

「……リル？」

「あ、うん、えっと、魅了が解けたらなんか入り口の方に巣みたいの作ってたからそのままにしていたよ」

訝しげに名を呼ぶオウルに、リルは慌てて答える。

「そうか、ならばそれでいい……今後も、このダンジョンが持つ瘴気や魔力に誘われて、妖魔や魔獣の類が迷い込んでくる事はあるだろうが、基本的に放置して構わん。コストのからぬ外敵への備えになる」

「結構ある事なの？」

リルの問いにオウルは頷く。

「元々ゴブリンは、洞窟のような暗い場所を好んで巣を作る。ゴブリン以外にも、妖魔には闇を好む者が多い。それに血が流れば瘴気も溜まる。屋外と違って風や雨で散らんからな。瘴気が溜まれば、魔に属する者にとっては居心地のいい場所になる。そうすれば魔獣の類も寄ってくるし、高

位の悪魔も呼び出せるようになる」

「あ……言われてみれば、ちよつと身体が軽くなってるかも」

「死体を大量に切り刻んだからな。もっと瘴気が濃くなれば、怨霊の類も発生するし、死者が勝手に動きだす事すらある。これだけのダンジョンを用意してやれば、労せずともある程度の守衛は手に入るのだ」

「なるほどねえ……」

内心、リルは苦笑する。先ほどまで弛緩していたオウルの表情はすっかり元に戻り、口元には僅かながら笑みが浮かんでいる。ダンジョンの仕組みを語る時の彼の表情はいつもこうだ。

「更に……」

オウルが言葉が続けようとしたその時。

聞き覚えのない、『ジリリリリ！』というけたたましい音が鳴り響いた。

「何これ!？」

「……侵入者だな」

オウルの表情が、更に引き締められた。

「侵入者ってどういう事!？」

急いで身支度を整え、ダンジョンコアへと向かいながらリルはオウルに問う。

「おそらく、冒険者だろう。『契約』をした村のどれかから依頼され、俺を殺しに来たのだろうな。

それが警報の罠に引っかかったんだ」

迷宮の入り口には、オウルの魔力で罾が張られていた。

「スケルトンの配置は？」

「この前渡された地図に、骨のマークがあつたからそこに平等に割り振っておいたけど……」

「よし、上出来だ」

ぼんぼん、とオウルはリルの頭を軽く叩く。初めて受けるストレートな誉め言葉に、リルは思わず頬を赤くした。

「今この迷宮にいる守衛は、ゴブリンとスケルトンの他には、ヘルハウンド四匹、ゴーレム二体、インプおよそ三百匹だ。インプは戦力の内に数えられんが、初級から中級の冒険者なら十分撃退出来るはずだ」

リルの様子は気にもせず、オウルはダンジョンコアに辿りつくまで魔力を取り出す。そして、コアに流れ込む魔力を通じて、ダンジョン全体に感覚を広げていく。そうする事で、オウルはダンジョン全体の様子を手に取るように見る事が出来た。

「中級の冒険者ってどのくらい？」

「この前の村長が、中級の中でも上位くらいだ」

オウルの言葉に、リルは少し青ざめる。中級一人で防戦一方、奇襲で何とか倒したのだ。中級が数人いたり、上級の相手だったらどうにもならない。

「……いた！ スケルトンと戦闘中か……しかし、これは……なんだと!？」

オウルが珍しく焦りの色を滲ませる。彼の見ている光景が見えないリルは余計に不安に駆られた。

「ど、どうしたの？」

「……スケルトン十体が一撃だ。……しかも、相手はたった一人。コイツは上級だな」

ダンジョンコアから手を離し、オウルは壁に立てかけてあった杖を手に取り、浴室のゴーレムを呼び寄せる。

「おそらくヘルハウンドも相手にならんだろう。ここで相手をする事になる。相手は魔法剣士だ。ゴーレムとお前で抑えている間に、俺が魔術を叩き込む」

「……わかった」

神妙に、リルは頷く。リルは一刀の下に屠られるだろうが、どうせこっちの身体は仮初のものだ。死んでも魔界に戻るだけだから問題ない。

「……もし勝てたらさ、また呼んでよね。まだまだやる事は山積してるんでしょ？」

「勿論だ。……来るぞ！」

オウルの声に答えるように、通路から一人の女が姿を現す。赤い髪をポニーテールにした、まだ少女と呼んでいいような若い女だ。とてもそんな凄腕には見えなかったが、纏う迫力は間違いなく彼女が相当の実力者であると語っていた。

「……君が、『邪悪なる魔術師オウル』？」

ゴーレムとリルの奥に控えるオウルに剣を向け、少女が問う。オウルは答えず、呪文の詠唱を始めた。

「沈黙は肯定、つて事かな。いくよ！」

小さく呟いた刹那、少女は凄まじい速度で駆けた。迎撃しようとリルが爪を長く伸ばし、ゴールムが腕を振り上げる。が、少女の動きに対して、それらはあまりに遅すぎた。

少女は疾風のようにゴールムとリルの間をすり抜け、一瞬にしてオウルの前に迫る。

「しま……っ！」

振り向いたリルが見たのは、少女の剣によって刎ねられ、宙を舞うオウルの首だった。

切れ目から鮮血が迸り、首が地面に落ちてごろごろと転がる。

一瞬遅れ、身体の方も地面へと倒れこんだ。

それと同時に、オウルの魔力を失ったゴールムが腕を振り上げた体勢のまま地面に倒れる。

「……君は人間……じゃ、ないよね。羽生えてるし。ご主人様の敵討ちとか考えるタイプ？」

少女がリルに向き直り、油断なく剣を構える。リルは両手をあげて降伏の意を伝えた。

「……まさか。わたしは契約で縛られてるだけだからね。主人が死ねば、契約も無効。とつとと魔

界に戻るわよ」

「そうなんだ？　じゃあ聞くけど、今あたしが殺した人が『オウル』であつてるんだよね？」

少女は剣の血を払うと、鞘に収めた。とはいえ、不用意にリルの近くに寄ったりはしない。

リルが彼女に襲いかかれれば、すぐさま剣を抜き放ち両断出来るのは明らかだった。

「うん、あつてるあつてる。すごい性格悪くて、人使いつていうか悪魔使いも荒いし、実年齢七十以上のくせに滅茶苦茶エロいし、ダンジョンの事ばつか考えてるダンジョン馬鹿」

「あはは、悪魔さんも結構苦労してたんだ」

朗らかに少女が笑う。

「でもね、そんなに嫌な奴でもないんだよ、うちのご主人様は」

リルの言葉に、少女は僅かな違和感を感じる。その原因を探ろうとする間もなく、リルは爪を伸ばして少女を切り裂こうと腕を振るった。

「わっ！ 敵討ちなんてしないって言ったのに、嘘吐き！」

少女はそれを難なくかわすと、剣を鞘から抜き放つ。

「嘘なんてついてないよ。『敵討ち』なんてしないって」

その言葉に、はっと気付いた時にはもう遅かった。少女に杖を向けたオウルが、一言呟く。

「『眠れ』」

薄れゆく意識の中で、少女は違和感の正体に気付く。

主人の事を評する言葉が、どれ一つとして過去形ではなかったのだ。

「良く気付いたな」

崩れ落ちる少女を抱きとめつつ、オウルはリルの頭をぼんと叩いた。

「子供じゃないんだけど」と言いつつ、リルは答える。

「言ったでしょ。主人が死んだらとつと魔界に帰るって。帰ってないんだから、死んでないに決まってるじゃないの」

魔界に帰るとしてもリルの意思は関係ない。契約の内容による強制だ。オウルはここまで計算して契約内容を考えたのかと、改めてリルは彼の慎重さを思い知った。

「ところでどうなったんの、それ」

既にぴつたりとくつつき、血の跡すらないオウルの首を指差す。

若返ったり、体力を戻したり出来るくらいだから傷を治せるのはわかるのだが、流石に死んだの生き返せるとは思えない。しかも、それが他人ではなく自分自身であれば尚更だ。

「大して珍しい術でもないんだがな。命を別の場所に置いているから、この身体はどれだけ壊されても死なん。代わりに、身体には傷一つなくても、命の方が壊されたら死ぬが」

「ああ……なるほどね」

何に命を保管しているかは言うまでもない。

オウルが最も大事にしているもの……つまり、ダンジョンコアだ。

「……それで、その子はどうするの？」

リルはオウルが抱きかかえる少女を示した。死んだ訳ではなく、ただ眠らせただけらしい。少女は規則正しくすーすーと寝息を立てていた。

「そうだな……どうやらコイツは、『英雄の星』の下に生まれているようだ」

「英雄の星？」

鸚鵡返しに問うリルに、オウルは頷いてみせる。

「ごく稀にいるんだ。何らかの宿命の下に生まれる人間が。そういった人間は大抵、幼い頃から他人の間とは段違いの能力を持ち、成人すればその道で一流以上の達人となる。が、その人生そのものも平坦なものではなく、必ず大きな不運や幸運を呼び寄せる事となる」

「へー……もしかして、オウルも『魔王の星』の下に生まれてたり？」

「そんな訳ないだろう。そうであれば、この齢になる前に迷宮を完成させるか、野垂れ死んでる」
オウルは自身を、『才も非才もない、ただ努力した年月の分だけの能力を持つ』と評した。唯一の僥倖は、寿命までにダンジョンコアを完成させ、龍脈を見つけ出した事だ。

「で、結局その子は？」

再びリルが問うと、オウルが表情を曇らせる。

「英雄の星のもとに生まれた者だ。殺そうとしてもそう簡単には死なん。かといって、洗脳魅了の術の類も効き目は薄い。ここぞという場面で解けるだろうな」

ぐっすりと寝ているのだから殺してしまえばいいとリルは思ったが、仮にも英雄となるべく生まれた者。殺そうとすれば何らかの奇跡が起こって命を拾うらしい。死ぬのは晩年、力が衰えた時。それも、惨たらしい死に方をする。それが英雄に生まれついた者の常なのだそうだ。

「じゃあどうすんの？　ずっと寝かせておく訳にもいかないでしょ？」

「……仕方がない、成功率があまり高くないからやりたくはないが、他に方法もない」

苦渋の表情で、オウルは決断した。

「調教するか」

ユニスが目を覚ますと、そこは暗い石造りの部屋の中だった。

ぼんやりとした頭で必死に状況の把握に努める。身体を動かそうとすると、右腕に繋がれた鎖がじやらりと音を立てた。

右腕だけではない。両手両足は鎖によって壁に繋ぎとめられ、大の字の状態からほとんど動かさない。更に身体自体もベッドに鋼の輪のようなもので拘束されていた。

身につけていたはずの武器や防具は全て外されており、少なくとも視界の範囲には見当たらない。僅かな明かりを灯すランプと、ユニス自身を拘束するベッド、そして鎖。それだけがこの部屋を構成する要素だった。

入り口には扉すらなく、どこかへと続く通路が闇の中に沈んでいた。

「目を覚ましたか」

その通路から、一組の男女が姿を現した。

琥珀色の髪に灰色のローブを着た、中肉中背の二十歳前後の男。そして、蝙蝠の翼を生やし、漆黒の髪を持つ、見ている方が恥ずかしくなるような服（というか、下着？）を纏った美女。

それを見て、ぼんやりとしていたユニスの意識ははつきりと覚醒した。

邪悪なる魔術師オウルと、その使い魔……この二人に、自分は負けたのだ。どうやら殺される事

はなかったようだが、果たしてそれは幸運だったのか。かなり怪しいところだ、とユニスは思った。「一応名乗っておこう。我が名はオウル。聞き及んでいるようだが『邪悪なる魔術師』だ。こちらは我が助手にして女悪魔のリル。……お前の名は？」

ユニスは必死に思考を巡らせる。絶体絶命のこの状況を、どうやったら乗り越えられる？ 武器はない、動く事も出来ない、生殺与奪権は完全に握られている。

「……ユニス。冒険者だよ」

フルネームは教えず、愛称だけを名乗る。力のある魔術師は相手の名前を知るだけで支配する事も出来る、以前知り合いの魔術師に聞いた覚えがあったからだ。

「なるほど。……ではユニス、一つ教えてもらいたい事があるのだが、お前にここに来るよう頼んだのはどの村の誰だ？」

「……別に誰に頼まれた訳でもないよ。邪悪な魔術師の噂を聞いて、成敗しようと思ってきただけだから」

自分でも厳しい言い訳だとわかっていながら、ユニスはそう言った。何の罪もない、純真な村人達に迷惑をかける訳にはいかない。それに、半分は嘘ではないのだ。魔術師の話聞いて、自分が倒してくる、と戸惑う村人達を半ば振り切るようにして出てきたのだから。

「ほう……では、その噂をお前に教えてくれたのは？」

ぐ、とユニスは言葉に詰まる。言い方を間違えた事に気がついた。

「か……」

「か？」

「風の噂で……」

リルが心底呆れたような表情をする。ユニスは言った事を自分で後悔した。

「風の噂か……それならば仕方ないな」

ところが、オウルはそんな苦し紛れの言葉に納得するかのような態度を見せた。

「そ、そうそう！ あたし頭悪いから、どこで聞いたかなんてすっかり忘れちゃってさ！」

「ば、馬鹿！」

ユニスの言葉に、何故かりルルが慌てて言う。

それも、オウルに対してではなく、ユニスに対してだ。

「覚えてないなら仕方ない。……全ての村を焼き払うしかないな」

何気ない様子で続けたオウルの言葉に、ユニスは表情を凍りつかせた。

「害意もない村を焼き払う事は残念だが、仕方がない。他に替えがないでもなし——」

「やめて！」

オウルの言葉を遮り、ユニスは叫ぶ。

「村の人は何も悪くない！ あたしが、あたしが勝手にやった事なの！ だから、お願い、村の人

達だけは……」

ガチャガチャと鎖を鳴らし、ユニスは懇願する。

この状態では、頭を下げる事も、縋りつく事も出来ない。

「では、悪いのは全てお前である、と言うのか？」

「そうだよ！ 村の人は何も悪くない、止めるのを振り切つてあたしが勝手に！」

「では、咎を受け入れ、全ての罰をその身に受ける事を誓うか？」

「……誓う。誓うから、村の人達には、絶対に手を出さないで」

「人聞きの悪い事を言うな」

オウルは嘖んで含めるように、言葉綴る。

「『村人を殺されたくなくば、言う事を聞け』——等と、お前を脅しているのではない。罪の在り処を問うているのだ。邪悪と自称するこの身なれど、罪無き者を無為に殺すような真似はせん。以前滅ぼした村とて、我に楯突き刃を抜いた故の事。罪がお前にもあると言うのなら、他の者を罰する道理などない」

「……わかった。罪は、あたしにだけある。だから、罰もあたしにだけ与えて」

ユニスはオウルを真つ直ぐ見つめ、そう言った。これから自分がどのような目にあうかは、おおよそ予想がついている。しかしそれでも、村人達に迷惑をかける事だけは避けたかった。正義感の強い、『英雄』となる運命を持った少女の最後の意地だ。

「わかった。ならば、お前に罰を与えよう」

オウルは懐から短剣を取り出し、その刃を動けないユニスの胸に当てた。

鋭い痛みを覚悟し、ぐっと目を瞑るユニスの予想とは裏腹に、短剣はユニスに傷一つつけず滑らかに胸元から腰にかけて走った。それに沿って、彼女の着ていた服がスッパリと両断される。

それは、ユニスが予想していた展開の中で最も可能性が高く、最も起こって欲しくないものだった。

しかし、肌を露にしたユニスに近づいてきたのは、案に相違しオウルではなくリルだった。

彼女は女のユニスでも惑わされるような妖艶な笑みを浮かべながら、透けるように白い指先をユニスの胸元に滑らせる。

「ふあっ」

声をあげた後、ユニスは自分から甘い声があがった事に驚愕した。

「ふふ、可愛い。敏感なのね……」

「ん、う……」

つう、とリルは指先をユニスの胸から臍の方に滑らせる。今度は声を出さないようにと構えていたにもかかわらず、何とも言えないぞくぞくとした感覚が背筋を駆け抜け、ユニスは声を漏らす。

リルが触れた場所がじんわりと熱を帯び、ユニスの身体の奥の方が疼く。今まで感じた事のない快楽に、ユニスは完全に翻弄されていた。同性相手とはいえ淫魔の手管は凄まじく、軽く触れていくだけでユニスはどんどん高まっていく。

「そろそろここも弄ってあげましょうか」

不意に、リルがユニスの股間に指を這わせる。

「ふふ、もうぐしよぐしよね」

クスクスと笑いながら、リルはわざと音を立ててユニスの陰部をまさぐった。くちゅくちゅと音



を立てられ、ユニスの顔は羞恥に赤く染まる。

「ここはどうかしら？」

「ひあっ!!」

リルの指がユニスの最も敏感な部分……淫核をかすめ、ユニスは思わず高く声をあげた。

「いい反応ね。処女だけど、オナニーはちゃんとしてたんだ？」

「そ、そんな事……ふあっ!」

言い返そうとした瞬間にリルが陰核をすりあげ、またもユニスは声をあげる。

「そんな事、何? そんな事大好き? そうよね、ここをこんなに尖らせてよがってるんだもの」

「ふ、あああっ! そ、んにやああっ! い、やめっ、駄目えっ!」

脇腹をくすぐり、乳首に舌を這わせ、かと思えば股間を指でさすりあげる。リルは完全にユニスの反応を掌握し、虚を突いてはその身体を翻弄していた。

「さて、そろそろいいわよ」

そんな言葉と共に、ぐいと両脚が押し開かれる感覚にユニスは我に返った。ここしばらくの記憶がない。どうやらいつの間にか意識を失っていたようだった。

覚えている限りで、リルはユニスを一刻(二時間)は黽っていただろうか。その人ならざる愛撫にユニスは何度も声をあげ、許しを乞い、よがり狂った。

汗と愛液でベッドのシーツはぐちゃぐちゃに濡れ、尻の下は失禁でもしたのかというくらいぬるい水が溜まっていた。恐ろしいのは、そこまでしてなおユニスを絶頂には至らせないリルの指の技

だ。

おそらくその気になればほんの一撫でで気をやらせる事も可能なほど昂らせておきながら、けしてオーガズムには至らせず、一刻もの間ユニスを嬲り続けたのだ。

そういえば、脚は鎖で繋がれて曲げる事も出来ないのに、何で広げられているんだろう……と、ぼんやりと考えていたユニスの意識を、股を裂くような鋭い痛みが覚醒させた。

「う、あああっ!？」

痛みに視線を向けると、いつの間にかオウルが両脚の間に身体を割り込ませ、そのいきり立ったものをユニスの秘部に突き入れていた。

内臓を素手で掴まれているような、重く鋭い痛みがじんわりとユニスに襲いかかる。それと同時に、純潔を失ったどうしようもない喪失感が彼女を襲った。

冒険者として魔物や盗賊達を相手にし、普通の娘のような恋愛が出来ると思っていた訳ではない。しかし、それでも彼女は人並みに初体験というものに夢を抱いていたし、大切にもしていた。それが今、見も知らぬ男によって踏み躪られたのだ。知らず、ユニスの頬を涙が伝った。

そんな彼女の頭に、オウルは優しく手を置く。すると、じんわりとした暖かさがその手から伝わり、痛みがすうっと引いていく。

「大丈夫だ。……痛みは消えただろう？」

ユニスはこくりと頷いた。耳元で囁かれた優しい声は、ユニスの胸に空いた喪失感の穴にスコーンと収まった。頭では、今日の前にいる男こそが自身の純潔を奪い、汚したのだと理解している。

しかし、ユニスの心は失ったそれを目の前にいる男が癒し、埋めてくれると感じていた。感じてしまっていた。

「動くぞ」

ゆっくりと、オウルが抽送を始める。その動きはユニスを気遣うように優しいものだった。破瓜の痛みはオウルがユニスの頭を撫でる度に和らぎ、代わりにオウルのペニスにユニスの奥を突く度に、身体と心を甘い疼きが満たしていった。

「ぐ、う……！」

ユニスは歯を食いしばり、必死に耐えた。これは、罰だ。罪を犯したもののへの当然の罰。だから、ユニスは耐えなければならぬ。

しかし、それは唐突に中止された。オウルは動きを止め、じつとユニスの顔を見つめている。ユニスも、困惑した表情で彼を見つめ返した。

「どうかしたか？」

オウルは尋ねるが。そう問いたいのはユニスの方だった。何故、動きを止めてしまうのか……そう言おうとして、ユニスは口をつぐんだ。そんな事を思うなんて、どうかしている。

「思う事があるならば、素直に述べてみる」

しかし、オウルはそれを見透かしたように囁いた。

「思った事を言うのは罪ではない。自然に、あるがままに振る舞う事が何故罪となる？ 何も耐える必要などなく、そのまま受け入れれば良いのだ。それが『正しい事』だろうか？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>